

新山協ニュース

△ 発行者 鈴木敏雄 △ 発行所 新潟県山岳協会
〒940 長岡市学校町1-12-23 室賀輝男方 TEL 0258-32-0428

7月22日～24日 笹神村

北信越国体終る

おめでとろ

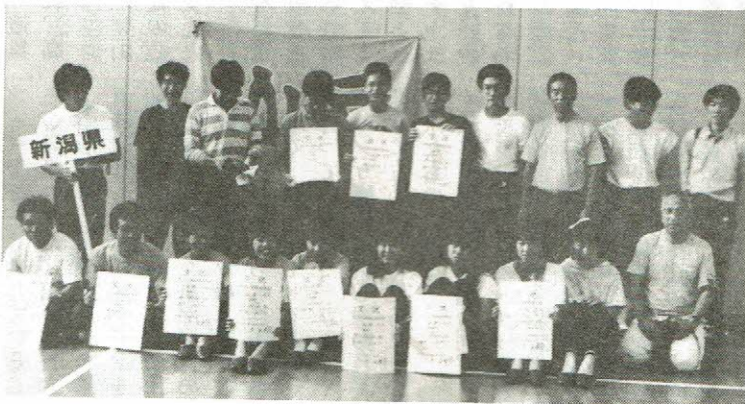
少年男子 }
少年女子 } 京都国体 出場権獲得
成年女子 }



踏査1位 少年男子



成年女子 踏査スタート



新潟県選手団

昭和63年度日山協海外委員会 および遭難対策研究会報告

海外登山委員会 田中純夫

さる6月25日・26日の両日にわたって仙台市で昭和63年度日山協海外委員会および遭難対策研究会が開催された。これは第2回東北地区海外登山研究会との併催という形で企画されたもので、一般公開部分においては東北6県からの参加者が50余名程も集まり、各県岳連（協会）からの出席者も含めると1000名程にもなった。日山協海外委員会を地方で開催して行こうという、第1回目の試みとしては成功であったと言える。地方からの参加者も含め、地方の活動をさらに活性化していくということから、次回の開催地は近畿地方（神戸市）で、ということが大約意志一致されている。

さて海外委員会日程第1日は午後1時30分より広島三朗海外常任委員の司会で開始された。まず最初に日山協石塚副会長の挨拶があり、各県岳連（協会）の横のつながりの必要性が強調された。続いて宮城県体育協会事務局長、および宮城県山岳連盟会長の歓迎の挨拶があったのち、出席者ひとりひとりから自己紹介がなされて会議に入った。

まず神崎忠男海外委員長より基調報告があり、昭和62年度の事業報告がなされた。

- ① 海外登山計画の審議と指導
3月31日現在海外登山隊20隊に推薦状を交付
- ② 国際山岳協会連合（UIA A）への出席
総会、理事会、各委員会などへの参加報告

- ③ 昭和62年度海外委員会および遭難対策研究会（6月13日、14日、東京）
- ④ 国際岩登り大会（ヨーロッパ・グランプリ）
（9月12日～27日、イタリア・アルコ）

- ⑤ 第26回海外登山技術研究会（2月20日～21日、八王子）
- ⑥ 報告会等の開催

関西地区海外登山報告会

(11月14日、15日、大阪) 海外登山女性懇談会 (12月15日、東京)

続いて会計報告がなされ、最後に63年度の事業計画が示された。若干のコメントが加えられた。63年度事業については特段新しいものはないようであった。

次に各岳連(協会)からの参加者を2班に分けて分科会が行なわれた。テーマは「各地域の海外登山実現に向けての動きと問題点」と「各地域での委員総会開催の可能性について」との2点で、参加者からは活発な意見が出された。そしてそこで確認された、横

のつながり、人と人とのつながりの重要さということ、組織があつて人があるのではなく、人があつて、人と人とのつながりから組織が生まれるということ、これは今日、組織の活動の低迷さが指摘される中で、非常に印象に残るところであつた。

以上で海外委員総会は終りとなり、続いて海外登山遭難対策研究会が東北地区海外登山研究会との合同という形で開催された。

まず始めに1987年12月、

群馬県冬期アンナプルナー峰登山隊が南壁ルートより登頂に成功したときの映画が上映された。これは冬期、無酸素、初という輝かしい記録であつたが、残念なことに下山中2名の登頂隊員が転落死してしまつた。上映後この群馬岳連

隊の隊長八木原剛明氏と登頂隊員の山田昇氏、三枝照雄氏を迎えて、登頂の様相、遭難時の有様などが説明され、高峰登山、しかも冬期ヴァリエーション・ルートからの登山における難かしさ、遭難の危険などについて体験を交えた興味深い話がなされた。

以上で日程第1日目を終了し、午後6時30分より立食形式で懇親会となつた。これは東北6県の参加者も加えて100名にもなる盛況な会となり、途中「三国合同、チョモランマ、サガルマータ友好登山隊」の隊員の紹介が行なわれた。(山田昇、伊丹紹泰、大宮求、三枝照雄、上野)

日程第2日目は第2回東北地区海外登山研究会という形で、午前9時より始まつた。まず地域別海外登山情報というところで、中国、ブータン、ネパール、パキスタン、イン

ドの順で、それぞれの地域の状況が一部スライドなども使

用して各常任委員から説明された。続いて東北地区での登山計画の発表と登山報告がなされた。まず始めは秋田県岳連で、パキスタンのルプガルサル

を中止するに至つた経緯と、新たに中国・甘粛省のアルチン・タークを計画していることが発表された。続いてH A J山形からは中国・崑崙の新

青峰遠征の様相がスライドを使用して報告された。この山は筆者の遠征した東部崑崙のカカサイジモンカ峰(6138m)よりもさらに西方にある山で、同じルートで入山して行つていたので、カカサイ

ジモンカ峰の写真も現われ、非常にすつきしく見ることに出来たものである。最終日程は「三国合同、チョモランマ、サガルマータ友好登山隊」の登山報告であつた。南北両面でのタクティク

ス、登山の様相などが、それぞれ隊員から報告された。①計画から終了まで 神崎忠男

②北面(中国側)の登攀 伊丹紹泰、山田昇

③南面(ネパール側)の登攀 大宮求、上野

④スライド上映 以上で予定された日程をすべて終了し、最後に神崎海外

日山協第2種指導員検定会

受検にあたって

悠峰山の会 佐々木 敏 郎

昭和63年度日本山岳協会第2種、地区指導員検定会の内、雪技術の指導法の模擬試験を行った。試験が行われて20日、北魚沼郡湯之谷村銀山平石抱小屋をベースに、中荒沢山麓で行われた。

受検者は、第2種指導員が私を含め3名、地区指導員が7名であった。検定員は三富名、計5名であった。検定の方法は、日本山岳協会公認指導員検定基準によつた。因に資格は、第2種指導員では、現在地区指導員の資格を有し、年令25才以上、山歴7年以上(冬山5年以上)、地区指導員では、山歴5年以上(冬山3年)で、所属団体

長の推薦する人である。第1日目の14日は、午後7時より石抱小屋において受付

時より石抱小屋において受付



を行い、さっそく検定に入
た。検定の内容は次のとおり
行われた。

最初の検定種目は「滑落停
止」から行った。私の場合は
検定員から「滑落停止の方法
を指導しなさい」と言う指摘
があり、地区指導員受検者数
名に対して指導を行った。指
導の内容は、(1)要点の説明、
(2)姿勢、(3)動作、(4)停止後の
処置、と口答で説明した。そ
して実際に自分で滑落して動
作を見せる実技指導を行った。
次の種目は、アイゼン無し
の雪上歩行での実技であった。
一人ずつ20m位の間隔をお
き、斜面の登下降及び斜登下
降を行った。引き続きアイゼ
ンを着用して、アイゼンによ

る雪上歩行の実技を行った。
急斜面での登下降及び斜登下
降を行った。検定員からは軟
雪に対する歩行時の審美的な
足(靴)の置き方に注意する
様にとの指摘があった。また、
アイゼン着用時の質問があり、
着用場所、着用方法等が指摘
された。因に着用時には利足
で安定姿勢をしかりととり、
反対の足に着用する。そして
アイゼンを着用した足でしっ
かりと安定姿勢をとり、利足
に着用する。この場合、斜面
の上部へ姿勢を向けて着用し
た方が良い、との事であった。

最後の種目は、2人1組と
なり、隔時登攀(スターカッ
トクライミング)及び連続登
攀(コンテナアンスクライミ
ング)で、ザイルによる確保
技術を行った。ともに指導法
及び実技とを行った。
隔時登攀は、2人がザイル
を結び、1人が雪の斜面を10
〜20mと実際に近い形で登り、
滑落し、もう1人が滑落者を
確保するといった方法である。
確保の方法は制動(動的)確
保(ダイナミックビレー)で、
種類は、スタンディングアッ
クスビレーで行った。検定員
からは、確保時の姿勢が山側

に傾むくので注意する様に、
との指摘があった。
連続登攀は、2人がザイル
を結び同時に行動し、1人が
滑落した際に他の1人が確保
するといった方法である。確
保の方法は隔時登攀と同様に
制動確保で行った。確保の種
類は大坂方式で行った。各組
とも確保体制に入るまでザイ

参加メンバー
村山一栄 隊長、涉外 32才
榎本明人 副隊長、医療 32才
松村守 装備、記録 33才
伊藤信明 食糧 24才
※ サイダー 1名
シュエルバ 1名
ポーター 4名
期間 88年3月2日〜22日
(21日間)
※ 登山行動期間 3月6
日〜19日(14日間)

アイランドピーク

アウイピーク遠征報告

水原山の会

コース

ル操作や姿勢のとりかたが煩
雑となり、難しく、2〜3度
と繰り返して実技を行った。
お昼頃までかかり、無事全
員が検定会を終る事ができ
た。各装備を取りまとめ、正
列して、検定員から閉会の挨拶
をいただいた。以上解散した。
以上検定会の様子を簡単に
述べさせていただきます。

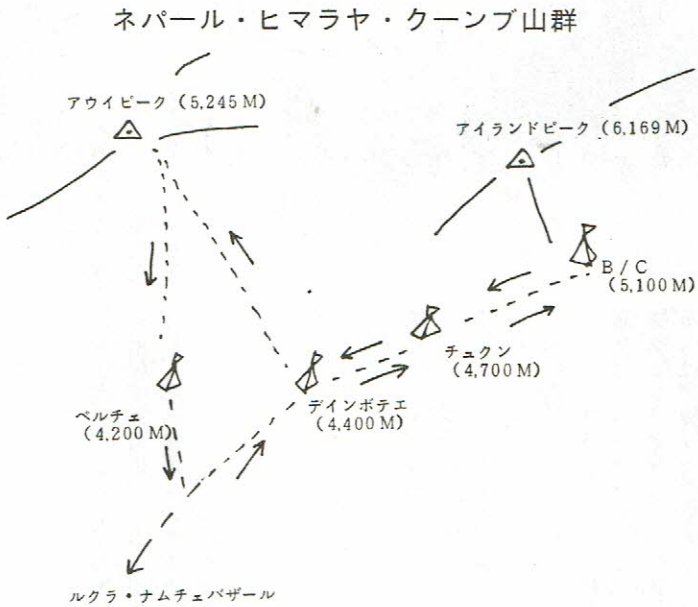
日本II(飛行機)IIバンコ
クIIカトマンズ
カトマンズIIルクラ
(歩き)IIナムチェバザ
ルIIチュクン(4700
M)II BC(5100M)
IIデンボチエ(4400
M)IIアウイピーク(5
245M)IIペリチエ
(4200M)IIナムチ
エバザールIIルクラ

ら悪くなったりする日が多か
った。
アイランドピーク(616
9M)のベースキャンプに、
2日遅れでたどり着き、全員
高度障害による頭痛にみまわ
れ、それによるゲリがはじま
り、体調不十分になる。
アタック当日、1名が酸素
不足による呼吸困難におちい
り登頂断念。至急4400M
迄下山する。

翌日、予定を変更して、3
名とサイダー1名の計4名に
て、アウイピーク(5245
M)への登頂に向けて出発す
る。
朝のうち小雪であったが、
午後より少しづつ晴れ間も見
えてくる。積雪40〜50cm位
の中、岩稜のやや急な登りを続
ける。ザイルはいらないが、
アイゼン、ピッケルは必要。
登頂時は、70000〜8000
0M級のヒマラヤの峰々が、
雲の上に浮かんですばらしい
景色で我々を迎えてくれた。
地上にくらべて約半分の空気
の中で約10000Mの登り
降り、予想以上にきつく、
又時間がかかり、この日は12
時間の行程となった。
下山時にヘッドランプを出

例年になく、天気が悪く、
安定した日がなかなか続かなか
った。例年なら雪のない所
に雪があり、晴れても午後か

し、星あかりの中をテクテク歩く。残陽に淡く光る、あのアマダグラムの姿は、言葉ではとても言い表わせないほどすばらしく、心に焼きつく!! 帰りのルクラの飛行場にて、も、天気が悪く飛行機が来ず、3日間の停帯となった。
 総費用 170万円(1人当り約42万円)
 準備期間 約10ヶ月
 準備登山 87年11月 富士山



88年2月 バンダイ山
 ※ 報告書作成済み。
 ※ 希望の方、送付します。
 (作成コピー代、送料込で8000円) (村山 ☎025016210243まで)

山と書物 ①

「日本風景論」志賀重昂著
 明治二十七年、国粹保存主

義を標榜する政教社より本書は刊行された、たちまちベストセラーとなった。日本風景の特徴を瀟洒、美、跌宕の3点に求め、日本人の景観意識に革命をもたらした。「日本風景論」が従来からの近江八景式や日本三景式の如き、古典的風景美は一蹴された観がある(小島烏水)とまで言われている。
 本書の特徴は日本の自然の美しさを、気候、海流、火山岩、流水の浸食など地理学上の見地から科学的、実証的に説明した点にあり、またもう一つ、和歌、俳句などを多く引用して日本の伝統的な美しさを強調し、それが諸外国に勝るとする強烈なナショナルリズムを打ち出している点にある。

もたれてきた。最近の研究に拠れば、本書中の沢山の山々の紹介記事はアーネスト・サトウ、チュンバレン、ガウラなど来日外国人の編集発行した「日本旅行案内」よりとったものであり、また「登山の準備」「登山中の注意」など登山思想、技術に関するものはF・ガルトンの「旅行術」に拠ったもの、あるいは盗作したものである点指摘されている。(黒岩健「登山の黎明」)
 明治文化一般と同様に近代登山もまた西洋の登山思潮を盗作という形で模倣しなくては日本にその気風は興作し得なかったのである。そしてその結果、日本の伝統的な山岳観と輸入された近代アルピニズムとの分裂の止揚が後世の課題として残されたのである。(悠峰山の会 田中純夫)

募集

具体協賛助会員

今年度より、競技団体一律3万円が目標準となりました。協会事務局で、とりまとめを納入します。

ご協力お願いします。一口、一万円。
 新入会員紹介

新潟県山岳協会

会員 499名
 新潟市四ツ屋町1の299
 3 木下力 方
 代表者 山田重栄
 ☎0251222
 14248

計報

自然保護副委員長、徳永正氏(48歳、長岡ハイキングクラブ)が去る6月29日病氣療養中のところ亡くなりました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

協会参与であり、元理事長の、齊藤平七氏(71歳、新潟県山岳協会)が7月27日心筋梗塞の為に亡くなりました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。